

企業名 安達焼窯元
 斎藤 貞雄 (陶号)定阿弥
 所在地 安達郡安達町油井字谷地19番地
 TEL 0243(23)2109
 FAX 0243(23)6796

陶工のプロフィール

昭和45年 県展工芸部門初入選
 昭和48年 日本彫塑会展入選
 昭和56年 福島県手工芸振興展受賞
 昭和60年 日本美術公論賞受賞
 平成3年 県美術奨励賞受賞・
 日本現代工芸展入選、以後連続9回入選
 平成5年 福島県総合美術展グランプリ賞受賞
 平成11年 日本現代工芸美術賞受賞
 (社)日本現代工芸美術協会本会員
 「日展」初出品し入選、作品名「春隣」

特 色

陶器は、日本で5世紀ぐらいから始まったものです。主原料は粘土、焼成温度が土器より高く、非透光性で若干の吸水性があるやきものです。桃山時代の茶陶ブームによって逸品の茶器が多く作られました。

安達焼は、昭和43年に現在地に安達窯を築窯し、定阿弥の陶号をもつ陶工によって生まれました。

安達焼の特徴は、当地より産出される鉄分を含んだ陶土を用い、風土性を活かし「侘び・寂び」を求め、常に立体の美の追求にあります。

そして、「火の芸術」といわれる「窑釜(あながま)」により松薪で7日間焼成した作品が数多く、火を絶やさぬよう薪を焚きつけ創り出される手法は、昔ながらの「技」と「志」によるものです。

また、茶色く光沢を帯びているものは、薪を焚いている時にでる灰が、陶器にふりかかることによって創り出される色合いも特徴です。

陶工としての修行は、昭和27年に陶師 田中末吉氏に、更には昭和41年陶師 吉田竹鳳氏にも入弟子し、技術を極めました。当時の昔式のロクロを覚えることは、「土もみ3年、ロクロが7年」といって大変な修行でした。

自分の住む町で良質の土に恵まれ、その土を掘出すとき縄文・弥生時代の土器や破片が出土されることも多く、古き先人達との語らいができ陶工としての冥利に尽きます。

その後、時代の流れで鬼瓦の製法も学び、二本松市の曹洞宗永松山龍泉寺の拝門の鬼瓦は会心の作です。

また宮城県境にある寺院の鬼瓦を作ったとき、和

尚の好意で一夜お寺の納骨堂で寝かせていただきました。

気味悪いはずの納骨堂の寝床なのに、大勢の仏様の話し声が一晩中聞こえ、温かく小春日和の野原で寝ているような素晴らしい寝心地でした。

仏の世界とは何と不思議な事があるのだらうと思うようになり、以来長年にわたり仏道の教えを受けました。その時につけていただいた陶号が「定阿弥」です。

そしてその時から仏像を作りたいと願うようになりました。

仏像を彫るため、彫塑を学びましたが「陶芸家が彫刻を勉強することは何を考えているのか」などと言われた事がありました。

陶工として、立体造形作品の基本は彫刻であると確信しており、既に20年以上も修行を重ねています。

平成5年には、安達太良山と阿武隈川が同時に眺められ、ここちよい風の音色と、木の香りに満たされた澄みきった景勝地。

高村光太郎・智恵子の純愛を育んだ地である、安達町の鞍石山の智恵子彫刻の杜に「茜の像」を建立しました。

仏像造りにおいては、昨年より原木を探して、長谷観音に仏彫祈願のお参りをしたせいか、稀なる原木が手に入りました。観音様のお導きとして、「巨大一木造り十一観世音菩薩」の制作を決意しました。

四国には多くの十一面観世音菩薩が祭られておりますので、仏彫成就祈願のため、四国八十八札所を巡拝し、精魂を込めて仏像彫刻に励んでいます。

現在、安達焼は一般の陶芸愛好家の方達と、週一回の陶作に取り組んでおり、また陶芸体験も行っており、世界に一つ・自分だけのオリジナル作品を造っていただいています。

大地に感謝を忘れず、明日もまた作陶を続けますと熱く話していただきました。

